

—JNMS のページ—

Journal of Nippon Medical School

Vol. 74, No. 6 (2007年12月発行)

Summary

Journal of Nippon Medical Schoolに掲載しましたOriginal論文の英文「Abstract」を日本医科大学医学会雑誌に和文「Summary」として著者自身が簡潔にまとめたものです。

Repair of an Infrarenal Abdominal Aortic Aneurysm is Associated with Persistent Left Ventricular Diastolic Dysfunction

(J Nippon Med Sch 2007; 74: 393-401)

腎動脈下腹部大動脈瘤修復手術は、遷延する左室拡張機能障害を伴う

尾藤博保² 中西一浩¹ 竹田晋浩¹ 金 徹¹
守 真輝¹ 坂本篤裕¹

¹日本医科大学大学院医学研究科疼痛制御麻酔科学²日本医科大学武蔵小杉病院麻酔科

背景：最近、左室拡張機能が多くの注目を集めている。しかし、周術期における左室拡張機能の変動を調べた研究はほとんどない。この研究の目的は、腎動脈下腹部大動脈瘤修復手術を受ける患者における周術期拡張機能の変動を、超音波組織ドップラー法を用いて調べることである。

方法：経食道心エコーを用いて腎動脈下腹部大動脈修復手術を受ける患者8名を対象とした。ドップラー心エコー検査は、術前 (T1)、大動脈遮断直後 (T2)、大動脈遮断解除後30分 (T3)、手術終了時 (T4) の時点でを行った。

結果：2名の患者は、術後第1病日に肺水腫になった。注目すべき点は、これらの患者の術終了時の僧帽弁輪部拡張早期速度 (Ea) が、対象患者中最も低下していたことである。左室流入速度波形から得られるE/A比は、T3およびT4で有意に低下した。僧帽弁輪部の収縮期駆出速度は、T3で有意に低下したが、T4では術前値に回復していた。Eaは、T3およびT4で有意に低下した。早期左室流入速度 (E) と僧帽弁輪部拡張早期速度 (Ea) の比 (E/Ea) は徐々に増加し、T3およびT4で有意に増加した。

結論：腎動脈下腹部大動脈瘤修復手術を受ける患者において、組織ドップラー法によって得られるEaはT3で有意に低下したが、T4でも低下したままだった。左室充満圧の評価に用いられるE/Ea比は、T3およびT4で有意に増加した。左室拡張機能障害の進展を確認するととも

に、それが術後疾病率・死亡率にどのように関連するかを調べる研究を行うが必要である。

Functional Assessment of Cancer Therapy-Lung (FACT-L)

(J Nippon Med Sch 2007; 74: 402-408)

日本語版の文化差を超えた妥当性

斉藤恵理香^{1,2} 横溝愉紀¹ Chih-Hung Chang³

Sonya Eremenco⁴ 金子日和^{5,6} 小林国彦^{1,5,6}

¹埼玉医科大学呼吸器内科²東京都立駒込病院³Buehler Center on Aging, Health and Society, Northwestern University Feinberg School of Medicine, Chicago, Illinois, USA⁴Center on Outcomes, Research and Education, Evanston, IL, USA⁵日本医科大学大学院医学研究科呼吸器感染腫瘍内科学⁶東日本チェスターズ・グループ、東京

背景：FACT-Lは中核質問票であるThe General Measure of the Functional Assessment of Cancer Therapy Scale (FACT-G) と、7項目のLung Cancer Subscale (LCS) を含む9項目のAdditional Concernsから構成されており、北米英語文化圏で開発された。私たちは以前に日本語版FACT-Gの妥当性について報告した。今回の報告ではLCSの日本語版開発の要約と文化差を超えた妥当性について検証した。

方法：LCSの日本語版はFACT Multilingual Translation Projectにより翻訳・逆翻訳プロセスを繰り返し開発された。計量心理学的な評価として、その構成概念妥当性をCronbachのアルファ係数と因子分析を用いて検討した。既知の群を識別できるか、経時的な変化を捉えられるかという臨床的妥当性についても検討した。

結果：FACT-Lを2週以内に2回180例の肺癌患者に自記式回答させた。日本語版LCSのCronbachのアルファ係数(0.62~0.67)は境界領域であった。因子分析により、LCSは呼吸器症状、食欲と体重減少、思考能力の3つの因子について問うていることが明らかとなった。臨床的妥当性については、既知の群比較において、LCSが患者の告知の有無で差があることを示した。しかし、おそらく2回の計測間隔が2週間と短いため、Performance statusの変化を指標とした場合の反応性は証明されなかった。

結論：LCSの日本語版は、オリジナルの英語版LCSと同様に、肺癌の患者の多面的な症状について質問をしている症状調査票である。日本語版の経時的な臨床的妥当性は、将来の臨床試験で調査されなければならない(現在、いくつかの臨床試験で証明されている)。

Journal of Nippon Medical School

Vol. 75, No. 1 (2008年2月発行)

Summary

Journal of Nippon Medical Schoolに掲載しましたOriginal論文の英文「Abstract」を日本医科大学医学会雑誌に和文「Summary」として著者自身が簡潔にまとめたものです。

The Effect of Insulin Resistance Improvement Due to Lifestyle Intervention on Overweight Perimenopausal Japanese Women: A Preliminary Study

(J Nippon Med Sch 2008; 75: 15-22)

更年期肥満女性へのライフスタイル介入試験によるインスリン抵抗性の改善効果

荏原弘光¹ 川瀬里衣子¹ 大坪保雄² 平泉良枝¹
竹下俊行¹

¹日本医科大学大学院医学研究科女性生殖発達病態学

²大宮中央総合病院産婦人科

目的：本研究では更年期肥満女性に対し、栄養・運動療法による12週間のライフスタイル介入試験を行い、身体組成および脂質、糖代謝、インスリン感受性に関する生化学的検査値の変化について調査研究を行う。

方法：対象は肥満症の更年期女性9名。対象者には1日当たり10,000歩以上の運動負荷と、200kcalの栄養摂取量と減量を指示した。身体活動量は加速度計内蔵型の万歩計で、栄養摂取量は食物摂取頻度調査票で評価した。身体組成は生体電気インピーダンス法による体組成計で測定した。脂質代謝、糖代謝の生化学的バイオマーカーに加え、インスリン抵抗性試験としてhomeostasis model assessment-insulin resistance (HOMA-IR)を測定した。これらの評価項目は開始前と開始後は4週間ごとに評価した。

結果：介入試験の前後で体重、BMI、体組成に有意な変化を認めなかったが、身体活動量に伴うエネルギー消費量は増加傾向を示した。9名の対象者のうち6名(66.7%)は試験開始前にHOMA-IRの異常を認め(平均値 7.0 ± 2.6 ; 正常値上限=1.5)、介入試験の後 5.2 ± 2.3 ($P < 0.05$)と有意な低下を認めた。

結論：本研究の結果より、たとえ体重や体組成に明らかな変化を認めないような穏やかなライフスタイルの介入で

も、インスリン感受性に良好な変化を与えることが示唆された。

Correlation between Clinical Pathologic Factors and Activity of 5-FU Metabolizing Enzymes in Colorectal Cancer

(J Nippon Med Sch 2008; 75: 23-27)

大腸癌における5FU代謝酵素OPRT, DPD, TSの活性と臨床病理学的因子との関連

山田岳史^{1,2} 田中宣威^{1,2} 横井公良^{1,2} 瀬谷知子^{1,2}
金沢義一^{1,2} 小泉岐博^{1,2} 大秋美治³ 田尻孝¹

¹日本医科大学大学院医学研究科臓器病態制御外科学

²日本医科大学千葉北総病院外科

³日本医科大学病理部

背景：Orotate phosphoribosyl transferase (OPRT), dihydropyrimidine dehydrogenase (DPD), および thymidylate synthase (TS) は5-Fluorouracil (5-FU) の代謝酵素であり、5-FUの抗腫瘍効果に影響を与えることが報告されている。

目的：われわれは大腸癌においてこれらの5-FU代謝酵素の腫瘍内の活性と臨床病理学的因子に関連があるか否かを検討した。

方法：外科的に切除された100例の大腸癌症例の腫瘍内OPRT, DPD, TS活性値をRIA法にて測定し、それぞれの酵素活性値が臨床病理学的因子(組織型, 進達度, リンパ節転移, Dukes分類, 脈管侵襲)と関連するか否かを検討した。

結果：低分化腺癌は高分化型腺癌, 中分化型腺癌と比較してDPD活性値が有意に高値を示した。リンパ節転移を認めた症例ではリンパ節転移を認めなかった症例と比較してOPRT活性値が有意に低値を示した。TS活性値はいずれの臨床病理学的因子とも相関を認めなかった。

考察：リンパ節転移を有する症例はOPRT活性が低いいため、低分化腺癌はDPD活性が高いため5-FUに抵抗性となる可能性がある。